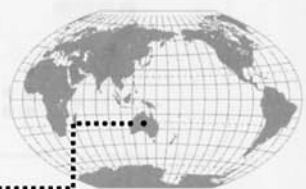


# 砂漠の水彩画

松山利夫 (まやまとしお)  
民族社会研究部



## 画家をやがして

オーストラリア大陸のほぼ中央、砂漠の真ん中にできた都市、アリス・スプリングス。街区を二分する乾季のトッド河には、アボリジナルの姿がちらほら見える。その乾ききった砂だらけの河を、僕は町はずれから上流に向かって歩



砂漠にひろがるアレンテの土地。ケヴィンはここを描いたのだろうか

きました。アボリジナルの水彩画家をさがすためである。アボリジナルと出会うたびに、だれかれとなく画家を知らないかとたずねる。うさぐさそうに見られ、素っ気ない返事がかえるだけで、いくらたつても手がかりがつかぬ。許可証がない

まま、翌日は思いきって、街区のはずれにあるアボリジナル居住区へいってみる。そこには、砂漠の各地からさまざまな目的でこの町にでてきた、一時的な滞在者がいるはずである。入り口には「立ち入り禁止」の看板がある。それを無視して足を踏み入れると、まもなくして数人の男女にとりかこまれた。「何しに来た」「タバコをくれ」「ビールを買ってこい」。僕がまきおとしたわけのわからない大騒ぎが一段落すると、デヴィッドと名の男が絵を描いてやるという。「画家か」ときくと、「ハーマンス・バーク派だ」とこたえる。

ハーマンス・バーク派とは、アレンテ(アラント)の男性、アルバート・ナマチラの流れをくむ水彩画とその作家たちをいう。一九三〇年代、ルーテル教会派が運営するハーマンス・バーク・ミッション(伝道所を中心とした集落)に住んでいたナマチラは、ここを写生旅行の拠点にしていたイギリス人画家、レックス・パターンの案内役をつとめていた。何回か砂漠を案内し、この集落で開かれたパターンの展覧会を見たあとの一九三六年のことだった。ナマチラは、描くべき対象の選択や構図の取り方、色や筆使いなどの制作技法をほとんど教えられな

## 写生はしない

その後ナマチラは、砂漠の風景を題材にした多くの作品を制作した。それらは師のパターンのよりも高く評価され、そのひとつを「アボリジナルが制作した作品」としては初めて南オーストラリア美術館が購入するところとなった。こうして彼は、「アボリジナル水彩画家」の地位を確立する。ナマチラはその技法を、多くの親族に教えた。教えられた人は、同じことを彼らの親族に伝えていった。ハーマンス・バーク派はこうして形成された。

デヴィッドもその一人だという。彼はケヴィンという男性を紹介すると、二人がそれぞれ描いてやろうといってくる。「ではお願いしま



ケヴィン・ワイリルの作品(標本番号H0102108)



制作中の2人



デヴィッド・コウクの作品(標本番号H0102107)

町である。二人は新品の道具一式をかかえて屋外に出ると、空きびんに水を入れ、缶をナイフで切り裂いてパレットをつくり、その場に座りこんだ。彼らは画用紙に鉛筆で線取りをし上半分ほどを水色に塗ると、いきなりガムの木(ユーカーリ)の一種、らしきものを描きはじめた。おどろいた僕は、「写生はしないのか」と叫んでしまった。ハーマンス・バーク派の作品はすべてが写生だと思っていたし、またそうも解説されていたからだ。「頭のなかにある」。それが二人のこたえだった。

## ツーリスト・アート?

二時間ほどで完成した二枚の水彩画は、確かにハーマンス・バーク派の特徴をまなまなしている。地平線が高いところにおかれ、手前の樹木は非対称をなし、画面のはしも中央と同じ重さで描かれている。さらに作品には、ヨーロッパ人がもたらした家屋も家畜も、アボリジナル自身でもないハーマンス・バーク派の画家だった。彼らが描いたのは、創世の時代に精霊が創りあげた風景であり、幾世代にもわたり人びとが生きてきた土地であった。二人の画家もまた、そこに暮らしている。

砂漠の水彩画は、いままお「ツーリスト・アート」としてしか専門家は評価しない。しかし、それらの作品は、砂漠にひろがるアボリジナルの世界を、人びとに紹介しつづけている。

(これらの作品は一九八二年七月に収集した)

て、指定された注文の品をそろえてでおした。「俺のカントリー(祖先からの本来の土地)、アレンテの土地を描いてやろう」。アリス・スプリングスは、確かにアレンテの土地にできた

す。そう頼むと、「絵の具と画用紙、筆がいる」という。この言葉に面食らった僕は、思わず心のなかでつぶやいた。「こいつら本物か。画家がなんで仕事の道具をもつてないんだ」。しかし、二日がかりで探し出した相手である。「嘘も文化のうち」と思いなおし